
MOON-4 夜叉 10 第2部

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MOON - 4 夜叉 10 第2部

【Zコード】

N7100M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

あれから三ヶ月が過ぎた。平和を取り戻したかのように見える新宿だったが、また新たな『被害者』が出た - - - 現代版ヴァンパイア伝説 MOONシリーズ『夜叉』第2部のスタートです。

1・市子（前書き）

お待たせしました。『夜叉』第2部のスタートです。

1・市子

新宿 歌舞伎町から少し離れた所にある派出所は、今日も3名の警察官が夜勤を務めていた。風俗法により深夜の営業を控えられたこの一角・・・それ以上に、人々はかつて街を賑わした『通り魔事件』を恐れて夜の外出を控えていた。

その為、以前は6名だった警察官も3名になり、しかし派出所に一人で残る事はなかつた。

「暑いなー。」

青い制服姿の警察官の一人が机の上で書類を書きながらぼやいた。

「もう、夏だね、これ。」

「そうですね。」

後輩の警察官も隣の席で、「自分は以前民間企業にいましたから、かたつ苦しい制服なんてこんな夜に着やしませんでしたよ。」

苦笑を交えて答える。

街は静かだつた。

110番も今夜は1本も入つていない。

心持、街行く人の姿も少ない。

「今夜は静かですね。」

後輩がそう言い、席を立つ。「空も見事な満月ですよ。」

「そうだな。」

もう一人の警察官が答える。「例の『通り魔事件』もあれ以来ぴつたり無くなつたしな。」

「結局、犯人は誰だつたんでしょうね。」

「さあ・・・何しろ、皆首筋に一つの『傷跡』だけ残し、後は血が全てなくなつていいっていう推理小説そのものの『事件』だつたからな。」

「その時、先輩は何処で勤務してたんですか?この新宿?」

「いや。」

先輩警察官は苦笑し、「俺、青森出身だから3カ月前はまだ青森そつちにいた。」

「そうですか - - - 自分もまだ民間企業にいましたからね、IT

関の。」

そんなたわいの無い会話が続く。

「それにしても」と、ふいに先輩警察官の方が、「岩下の奴、遅いな。巡回に行つたきり。」

「そうですね - - - 」

左手首の時計に目をやる。「もう一時間過ぎますね。」

「歌舞伎町だけの巡回なのにな。」

不審に思った先輩警察官は、腰から無線機を取り出した。「ちょっと連絡入れてみるよ。お前はちょっと外を見ていてくれ。」

「わかりました。」

彼の言葉に従い、後輩は少し所外へ出た。

人通り少ない・・・・・皆無と言つてもいいだろ?。時刻は深夜3:00を廻つていた。

「どうです?先輩。」

と、振り返る彼の目の前に紅の一つの瞳があつた。

「 - - - - - 」

驚く間もなく、意識する間もなく、後輩警察官はその場に倒れた。首筋に二つの『傷跡』を残し。

紅の瞳を持つ青年は、自分の背後にあるデスクの方に視線を戻した。

そこには - - - 既に『死体』となつて机に突つ伏しているもう一人の警察官の姿。

『どうした、山野警部!』

無線から連絡を入れたばかりの同僚 岩下の声が聞こえてくる。

その紅の瞳を持つ青年は、静かにその無線機を取り上げ、

『歌舞伎町で『通り魔事件』が起きました。被害者は2人共警察

官です。」

そして、そのまま無線を切る。

くすり・・・・・と口元に『2人の血』を宿し、冷たい微笑を浮かべる。

天空の満月が瞬いた。

「お嬢。どう?新宿(この街)の結界は。」

「まだ強いわ。」

何処からか、少女の声が聞こえて来た。

「『帝王』は死んだのに『結界』だけが強いなんて。」

「今、お嬢の『食事』を仕入れたから少しはその『食事』をして休んだ方がいい。」

「そうね、榊。」

少女は青年 榊の言つ通りにした。「じゃ、私秀の看病してるから、早く帰つて来てね。」

「お嬢、『血』^{エナジー}の使い過ぎ。」

何処に向けてかも判らず、榊は夜の闇の中、そう言い派出所を後にした。

東京 桜田門。

その警視庁本部に『連續通り魔事件』の本部が置かれていた。3カ月前『事件』がピタリと無くなつた後もその本部は設置されたままだつた。そして、今、新たなる『事件』に100名を超える都内の警察官の幹部クラスが集められている。

昨夜の歌舞伎町での『事件』によつて。会議は朝7:00から始まつてゐる。

「被害者は歌舞伎町派出所の警察官2名です。」

捜査官の一人が淡々と事件の経緯を述べる。

3つの部屋に別れた幹部はモニターを通じてその様子を見ていた。『検視の結果は大量の出血によるショック死とされていますが』そこで一端口をつぐみ、『現場に血痕は残されていません。ただ

-----3か月前まで起きていた連續殺人事件同様、首筋には一つの傷跡が残っています。」

モニターはその傷跡の映像に変わる。

「3か月前も事件は新宿だけで起こっています。今回も同一犯の可能性が高いです。」

「その他の共通点は？」

捜査本部長が尋ねる。

「はい。事件は『満月』近くに起こっています。欧米ではもう当たり前ともされていますが、満月近くになると殺人事件を始め様々な『事件』が起きます。アメリカではそれは科学的にも証明され満月近くには警備を強化しています。」

「日本じゃねー。」

そのモニターを見ていた一人の警官がメモを取りながら呟く。「深層心理なんてまだ解明されてないから、『満月』は理由にならないんじゃないの？」

そして、隣の刑事に視線を移す。

「早坂さん、3か月前新宿の派出所にいたんでしょ。」

「ん。いたよ。」

モニターが『事件』の詳細を次々と告げる中、早坂 充刑事は、「あの時はまだ俺も『おまわりさん』だつたからね。」

「危なかつたじゃないですか。」

「危なかつたね。毎晩ヒヤヒヤしながら巡回してたよ。」

黒のスーツに青いネクタイをしめた彼は隣の同僚警察官に目をやり、「その『死体』を何度も見て来たよ。だけど、あれは普通の人間がやる事じゃないね。」

「首筋の二つの傷跡は？」

「鋭利な刃物・・・・・・・というにはあまりにも小さすぎる。『錐』でも使って・・・・・・・かな?だけどそれだけじゃ『出血死』にはならないでしょ。」

早坂はメモを取る手を止め、頭の後ろで両手を組んだ。「一体、

何が目的でどうしてこんな事するんだろうな。3か月前も確かに『満月』近くに『事件』は多発していた。』

空調の整っている室内だつた。

クーラーが適度に利いているため上着を脱ぐ必要もなかつた。会議は的確に進められ、約2時間で捜査方針が決まり警察官たちはそれぞれの役割を果たすため、席を後にした。

早坂たちも席を後にする。

彼は同僚の警官と共に休憩所へ行き、缶コーヒーを自動販売機で買つた。

ガシャン

「確かにね」

同僚の刑事が早坂に言つ。「現実離れした事件だよな、3か月前の事件と言い今朝方の事件といい。」

その本庁3階にある休憩所には他の警察官も集まつていた。

「そうだね。」

早坂は微糖「コーヒー」を一口飲み、「『Office To On e』つていうプロダクション知つてる?」

「知つてますよ、あのカメラマンたちの。」

「そう。」

そこで早坂は目を細めた。「そのスタッフの一人が『事件』に遭つてたんだ。」

「そうなんですか。」

「その時はまだ深く考えなかつたけど」

と呟く様に言つ。「何か彼らが・・・・もしくは彼らの中の誰かがこの『連續殺人事件』に關してる気がするんだよね。」

「どうして、そう思うんですか?」

「何となく。」

早坂は一気に缶コーヒーを飲み干し、「ねえ、宮坂ちゃん。一緒に

に『Office To One』調べてくれない? どうも気に入るんだよね、あの瞳・・・・・・・・

「え、いいんですけど。」

富坂と呼ばれた同僚の刑事は頷き、少し小首を傾げた感じで、「・・・・・『あの瞳』ってどういう意味ですか?」

既にその場を離れかけた早坂の後を追つ。

「『Office To One』の専属モデル。」

早坂は少しだけ顔を富坂へ向けた。「不破和人・・・調べてくれない?」

後には捜査の為に打ち合わせをする所轄内の警察官だけが残された。

「・・・同じ事、言つてた。 - - 貴史が殺された現場に、騒ぎを聞き付けて集まってきた近所の人たちと、まるで入れ違うかのように、一人の青年が立ち去つて行つたつて・・・・・。」
「そう、余程彼の姿が、その新宿警察署の人の記憶に残つたのか・・・・・貴史の知り合いかつて尋ねに来たのよ。」
「妙に均整のとれた顔立ちと・・・」

立会の場にいた、信一が後をつなぐ。「警察署の同僚には、笑い飛ばされたけど、その警察官は『彼は碧の瞳をしていた』って言い張つていた・・・・・。」

1 市子（後書き）

・・・・・これは週末「缶詰」「だな（一円）」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7100m/>

MOON-4 夜叉 10 第2部

2010年10月9日04時15分発行